# 『八重葎』注釈（中）

田村俊介

今回掲載するのは、全体をおよそ二十八の段落に分けた、その中盤の九段落、今井源衛氏『やへむぐら』（古典文庫、一九六一年）で言えば、55頁から165頁に亙って本文が掲載されている、その93頁三行目から132頁二行目までである。今井氏の古典文庫本には、注や引き歌、部分訳が掲載されているが、今回の範囲で言えば特に、注一九六、注二三二を訂正し、又、出典として指摘されていなかった、『源氏物語』「総角」の、宇治大君の死の前後の場面から引例する。翻刻の段階の今井氏の誤りと思しき箇所は、今回の範囲では極めて少ないが、117頁四行目（ここに誤りがあるということは、私見に過ぎないが）である。

＊

**凡例**

◎本稿は、静嘉堂文庫本『八重葎』（『やへむぐら』）の釈文を掲載し、これに必要な注釈を加えたものである。

◎底本の様態、『八重葎』の他の写本との本文比較は、他書に譲る。既に出版された学術書にも記載されているところであり、又、今後出版される学術書にも詳述される予定であるとのことだからである。このため、次のような処置を取った。

ア．底本に誤写があると思しき箇所は、語釈に記した。

イ．底本には、引歌引詩をあらわす山型の印があるが、これは、本拙稿では、省略に従う。

ウ．底本に見セ消チ・補入がある箇所については、見セ消チ後、補入後の本文に基づき釈文を作った。例えば、一〇丁表5行目に「御

有さまかは」とあるが、これは、「御有様かは」と釈文を作り、消された「な」の字は記さなかった。静嘉堂文庫本の様態の厳密な再現は、古典文庫本を含む他書に譲るつもりだからである。

ウ．底本の仮名遣いは歴史的仮名遣いに直し、適宜、ひらがなを漢字に、漢字をひらがなに直した。なお、このような処置に準じて、例えば、「かう」を「こう」に直した箇所もある、具体的には〔九〕に、「内裏には弘徽殿さぶらひ給ふに」と記した箇所は、底本では「うちにハかうきてん……」（一七丁裏8行目）である（前号所収の範囲）。

エ．会話文には、「　」を付けた。その会話文の中の会話文には、『　』を付けることがある。更にその『　』で包まれた会話文の中の会話文には、＜　＞を付ける予定である。そして、話者を（　）で括って示すことがある。

オ．心内文に就いても、前項に準ずる処置を施すことがある。

◎諸作品の引用には、主として、次の叢書を用いた。

①小学館発行日本古典文学全集【略称　全集】

②小学館発行新編日本古典文学全集【略称　新全集】

③岩波書店発行新日本古典文学大系【略称　新大系】

④新潮社発行新潮日本古典集成【略称　集成】

これら①～④を用いる場合、略称で示し、これら以外の叢書や研究書を用いる際には、正式の書名、著者（編者）、出版社、出版年等も書き添えることにする。

◎和歌集の引用には、次のような基本方針を採る。

イ．八代集のうち、新全集が収録している作品（『古今和歌集』、『新古今和歌集』）については、新全集を用いた。

ロ．八代集のうち、イで記した二つの歌集を除く六つの歌集（『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』、『後拾遺和歌集』、『金葉和歌集』、『詞花和歌集』、『千載和歌集』）については、新大系を用いた。

ハ．それ以外の歌集については、角川書店発行『新編国歌大観』（一九八三年～）を用い、その叢書名も書き添えた。

◎散文作品の引用には、次のような基本方針を採る。

イ．『徒然草』の引用は③の新大系に拠った。正徹本を底本にしているからである。

ロ．『徒然草』を除くほとんどの作品については、②の新全集を用いた。同叢書は、キッコーカッコ（〔　〕）で段落番号を示しているので、それによって、引用箇所に直接当たる便を図った。『源氏物語』からの引用の場合、巻名とそのキッコーカッコ内の段落番号のみを示し、（『源氏物語』という）作品名は省略した。

ハ．新全集以外の叢書（研究書）から引用する場合、その叢書名（研究書名）を正式名称、若しくは、略称で示した。

研究書を引用する際には、著者（編者）、出版社、出版年等を書き添えることにした。但し、次の三著については、二重三角カッコで包んで、著者の苗字のみ、若しくは、著者の苗字と論文名や書名のみ記させていただく予定である。

○今井源衛氏『やへむぐら』（古典文庫、一九六一年）の解題や注及び本文表記に添えられた注記　→　《今井氏》

○辛島正雄氏「「八重葎」物語覚書――中世物語における『狭衣物語』受容の問題と『八重葎』の位置――」（『文学研究』第八二号、一九八五年）。二〇〇一年に、「『八重葎』覚書――『狭衣物語』顕彰の物語として――」という題で、『中世王朝物語史論（下）』に採録。本拙稿で引用する際には、再録に拠る　→　《辛島氏「『「八重葎」覚書』」》

○久保田淳氏・馬場あき子氏編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）　→　《久保田氏・馬場氏『歌ことば歌枕大辞典』》

◎和歌集や散文作品を引用する場合、右の引用テキストに直接当たって引用した。従って、文章の表記や歌番号等に就いて今井氏の引用の仕方と違うこともある。しかし、古典文庫本に同じ作品の同じ箇所からの引用がある場合には、《今井氏》などと記すことにした。

〔一三　叔母の再婚〕

その頃、中務の宮の御乳母の夫（をとこ）、大弐に成りて筑紫へ下る。

北の方は、三、四年、先に失せにき。（大弐）「いかでさるべき人もがな。語らひて行かむ」と思ひ成りて、この叔母の隣の主（あるじ）ははやうより知れる仲らひにて、折々出で詣で来る。年、四十七、八なりける。（隣の主）「など、今までかくては過ぐし給ふ。女君たちも多くものし

給ふに、後見なきは心苦しきわざになん」と聞こゆれば、（大弐）「さかし。我もさ思ひ給ふれど、そのほだしどもの扱ひをうるさく思ふにや侍らむ、受け引く方の侍らねば、今日今日と過ぐして、なにがしが知るまじきわざまで取りまかなひて、いと耐へ難く、見る目もかたくなしう侍り。ゆゑづきたる姥もさぶらはば、仲立ちし給へ。このあなたにおはせし人は、今に一人やものし給ふ。これなどは思ひ立ち給ふまじくや。御姪とか聞こえし女君ももろともに誘ひ給はば、民部の大輔にあはせ奉りて、我が一つのあとをもしろしめさせむと思ふは、似つかはしからぬこととや思す」と言ふ。（隣の主）「それなん、いと良き御仲らひにものし給はむ。さも思ひ給はば伝へてむを去年の秋より、いかなるたよりにか、故左の大臣の中納言の君通ひ給ひて、よろづにまめやかに聞こえ給へば、（叔母）『思はずにうつくしき御宿世ありて、この御徳を見ること』といみじう喜び給ふめれば、何か、はるばると下らむとは、思ひ立ち給はむと思ひ侍る」など言へば、（大弐）「あな、はかなや。さてその上達部のおはすらむを良き御幸ひとや思ひ給ふ。よろづの才すぐれ、容貌、心もかしこうおはすとて、公のかたじけなく恵み給ふに心驕りし給ひて、大臣の御遺言に、（左大臣）『右大臣殿の中の君にあはせ奉り給ひて、御後見をもせさせ給ふべく』、又、うちうちにも、（左大臣）『この殿をたのみ聞こえて、なにがしと思はむなん、行く道も嬉しかるべく』と返す返す聞こえ置き給ひてしかば、殿よりは、いとねんごろにたびたび聞こえ給へど、（中納言）『帝の姫宮ならではえ奉らじ』とて、三十路近く成るまで一人住みして暮らし給ふよ。この女君などは、思すことかなふまでの慰めなり。さるは、江口の君などと同じことには侍らずや。今一、二年が程にすさめられ給ひて、藻に住む虫の我からと音を泣き給はむは、いとほしきことなりや。民部の大輔が妻にてはしまさば、司、位こそその中納言殿には及び侍るまじけれ、顔、容貌はあまり負け奉ることも侍るまじ。心、はた、まめやかなるものなれば、高きも短きもなべて女の忍び難きことにし給ふなる脇目も使ひ侍らじ。これぞ、まづ、何の宝にもまさりて心行き給はむ。そのほかのもてなしは、大臣、大将の北の方にも落とし奉らじ。世の中に人の蔭女程口惜しきことあらむや。子など出で来れば、まことの上の御子に取られ、あるは、本妻にせためられて、尼法師に成りて山里に取り籠もれど、本より催さぬ道心なれば、仏の御心にも叶はで、この世もかの世もいたづらになさずや。少しも心賢き人は、一よ二よの節はよしなしとて、主の宣ふことをさへ否び侍るなど、聞き伝へ侍る。されど、ことわりなりかし。男だに、知恵、才学あるは難ければ、ましてはかなき女におはすれば、嬉しうめでたきことに宣ふも」など、畳をつきしろひつつはちぶき居るに、はや、この人もかたはられて、（隣の主）「まことに宣ふことに、一つしてあだなることは侍らぬ」など言ふも、をこがまし。

昔より、隔てなく言ひ交はす仲にて、例もかたみに行き通へば、その夕暮れに隣の主、まうで来て、大弐の言ひしことども心地良げに語り伝ふれば、もとより少し鄙び、なほなほしき叔母君にて、（叔母）「いかでか」なども言ひあへず、うち笑みうなづきて、（叔母）「身づからのことは、今更の齢に、又人に見え奉らむも良きこととは思ひ侍らねど、いみじう愛しと思ふ君のためだによろしきことにて侍らば、（叔母）『命をさへ失ひても』と思う給ふれば、ましてこれは、世の常あることなれば、いかがはせむに思ひ弱りてもろともにものし侍らむ。年たけ、ものの心も少しはわきまへたる我だに行く末のことまではたどり得で、ただこの頃の御有様をひとへにめでたしと見奉れば、まして、若き心には、ひたみちになびき給ひて、あはれなることに見え給へば、ありのままに聞こえさせば、伴ひ難くや。ただよくたゆめて、筑紫へまかる程に誘ひてまし」と言ふ。（隣の主）「それにまさることやは。さらば、大弐にそのよしを」など言ひて帰りぬ。

心の内にも（叔母）「見る目に飽かぬ御様、容貌のめでたきに迷ひて、（叔母）『良き幸ひも出で来しかな』と思ひしかど、行く末たのもしき御もてなしあらむとも思はず。まづはかく程経るまで、殿にも渡し給はず。おはしますとても、盗人など言ふひたぶる者の忍びありくらむやうに、夜中、暁ならで見え給ふこともなきをあやしう思ひゐしは、さは、大弐の宣へるやうに、秋風立たば離れ給はむとにや。又さらで大臣へ渡り給ふにしては、はらからものし給はむも又、いかにぞや。さばかりめでたく、あなたこなたにもてかしづかれ給はむに、妹にてだにおはせで、なまなまのこのかみにて、蔭女に成りて、いづ方ざまにもめざましきものにおとしめられて、かくあぢきなき住まひにておはせむは、胸痛きことの限りなるべし。とてもかくても、この君にかかづらはむはいとあるまじきこと」と思ひなりぬ。（叔母）「よし、何事も先の世の御契りとて、宿世のままに見放ち聞こえて下らむこと、はた、さらぬ別れの道ならでは、一日もあるべきことかは」と思ひ続けて、こなたに来て見給へば、らうたくをかしげなる御様も、民部の大輔など言ふらむ人に見すべくもあらず。（叔母）「心に任せぬ世の中とは、昔より言ひ置き侍れど、身に当ててはこの頃こそ思ひ知られぬれ。（隣の主）『筑紫へ行く人の、〈誘ふべき〉と切に言ふなれば、思ひ立ちね』と和泉殿の北の方、聞こえ給ふ。亡き人のため後ろめたく、さりとて若きにもあらず。殿の御心のあはれにたのもしうおはすを見奉れば、かくて見置き奉るも、心もとなき筋はことに侍らねど、ここらの年月片時もほかほかに慣らはざりしに、別れ奉らむ悲しさは、これぞえ耐ふまじき心地のし侍れば、思ひ立たむことはあるまじく、返す返す聞こえしかど、和泉殿さへいまして、（和泉守）『このこと聞き入れずは、命を失ふか、さらでは都の内にもありがたし』と切に責め宣はすれば、えいなび果てでなん、まからむに定めぬ。（叔母）『君

をももろともに誘ひ奉らむ』と聞こえやり侍れば、（大弐）『さやうに、うつくしくあはれと思す人のおはすらむ人をいかで西の国の果てへ率て奉らむ。もとよりおのが身に引き添へ奉る御身なりとも、かかる御幸ひをこそ願ふことにはあらめ。それなん、あやにくにかけてもあるまじきこと』と言ふなれば、いづ方につけても別れ奉らむこそ悲しう苦しけれ」とて、うちひそみ給ふ。聞き給ふ心地は今少し乱れまさりて、（姫君）「いかにせまし。あはれなることに人も言ひ知らせ、身づからの心にも、月日に添へて心深く契り宣はすれば、変はり給ふべき様にも見奉らねど、いさ、又、我だに知らぬ心の果ては、まして、行く末、うち解くべくもあらず、離れ果て給はむ浅茅が原をも、この人にもて隠されてこそ、露のよすがもあらめ。ただ、一方に慕ひ聞こえてまし」と思ふには、又、さすがなること多く思ひ続けられて、いみじう悲しければ、ものも言はず泣き給ふ。

大弐はやがて、その程に通ひそめてけり。古めかしき身の、今更かかるありきの後手もをこなるべければ、六条なるおのが家に渡さむと聞こゆ。

**語釈**

**○その頃、中務の宮の御乳母の夫、大弐に成りて筑紫へ下る。**　主としてこれ以降、『狭衣物語』の飛鳥井姫君物語が出典として用いられることになる。

**○姥もさぶらはば、**　大弐も男である以上、若い女性のほうがいいのだろうが、やや譲歩している感じが、「姥も」の「も」に表れている。

**○仲立ち**　「男と女を結び付ける仲人」の意の用例は、〔一〇〕にも見える（〔一〇〕では、「琴」を指す）。

**○よろづの才すぐれ、……（中納言）『帝の姫宮ならではえ奉らじ』とて、三十路近く成るまで一人住みして暮らし給ふよ。この女君などは、思すことかなふまでの慰めなり。**　東屋巻で、中将の君が薫の人柄に不信を抱き、浮舟と結婚しても「まめやかには」思ってくれないだろうと予想する詞と似る。「人の言ふを聞けば、年ごろ、おぼろげならん人をば見じとのたまひて、右の大殿、按察大納言、式部卿宮などのいとねむごろにほのめかしたまひけれど聞き過ぐして、帝の御かしづきむすめを得たまへる君は、いかばかりの人かまめやかには思さん」（〔一一〕）。

**○尼法師に成りて山里に取り籠もれど、本より催さぬ道心なれば、仏の御心にもかなはで、**　夫の浮気のため即興的に出家した女に関して、

「仏のなかなか心ぎたなしと見たまひつべし。濁りにしめるほどよりも、なま浮かびにては、かへりて悪しき道にも漂ひぬべくぞおぼゆる」（「帚木」〔六〕）という思想が、雨世の品定めの中にある。《今井氏》

**○一よ二よの節はよしなしとて、主の宣ふことをさへ否び侍る**　今井氏は、出典として、『大和物語』第八十九段、「おなじ女に、故兵部卿の宮、御消息などしたまひけり。「おはしまさむ（＝これから、貴女の所に行こう）」とのたまひければ、聞こえける。たかくともなににかはせむくれ竹のひと夜ふた夜のあだのふしをば」（「ひと夜」の「よ」及び「ふた夜」の「よ」には、「節」が掛けられている。「ふし」は「節」と「臥し」の掛詞）を指摘する。但し、新全集『大和物語』（底本は、厳島神社宮司野坂元定氏所蔵天福本）では、この章段は、第九十段である。

**○この人もかたはられて**　不審。底本は、確かに、「此人もかた八られて」（二六丁表3～4行目）。文脈からは、「この人もかたらはれて」が期待される。

**○（叔母）『命をさへ失ひても』と思う給ふれば**　底本は、「……と思ふ給へ八」である（二六丁裏6行目）が、今井氏の推定（四三頁1～3行目）に従い、「給ふれば」の誤写だと判断する。

**○いかがはせむに思ひ弱りて**　求愛を仕方なく受け入れる、ということ。薫が宇治大君にかけた詞の中にも、「なほ、いかがはせむに思し弱りね」というのがある（「総角」〔一〇〕）。

**○殿の御心のあはれにたのもしうおはすを見奉れば、かくて見置き奉るも、心もとなき筋はことに侍らねど、**　叔母の詞の中の一節であるが、本心ではない。

**○和泉殿さへいまして、（和泉守）『このこと聞き入れずは、命を失ふか、さらでは都の内にもありがたし』と切に責め宣はすれば、**　これもうそであろう。

**〔一四　母、小康状態。中納言、姫君と和歌の贈答〕**

かく言ふに、弥生も十日余りに成りぬ。上の御悩み、同じ様にて、三十日にさへなれば、誰も誰もいみじう思し嘆くに、御祈りの僧も今までそのしるしの見えぬは、行ひのたゆき方に人の見るらむも口惜しき心地して、いみじう心を起こし、数珠の緒も擦り切りつつ祈り騒ぐ

に、少しよろしう見え給へば、人々嬉しうたふとがらせ給ふに、汗うち拭ひて咳き居たるもしたり顔なり。中納言の君の、いみじき御心尽くしに少し面痩せ給へるを昨日今日ものおぼえ給ふ程にて、愛しと見給ふままにうち泣かせ給ひつつ、（母君）「心地はこよなくさはやかにこそおぼゆれ。さりとも、このままにやと思ふ」など聞こえ給へば、（中納言）「甲斐無く見奉り侍らましかば、いかに口惜しくと思う給へしに、今日の御けはひ見奉るは、言ふべくもあらぬ喜びになん」と聞こえ給ふ。（母君）「惜しげなき命の程をかく聞こえむは、子ならざらむ人は、いかで」と、いとど泣きまさり給ふ。（母君）「例の方へおはして休み給へ。ここにはこれかれものすれば、心もとなき様にもあらず」と宣ふ御心のうちには、かの辺りのことさへ思し出でて、（母君）「いかに思しやらむ。少し忍びては渡り給ひねかし。あまりなるまでのまめやかさなれば、（帝）『宮仕へもすまじく籠もり居ね』とかたじけなく宣はせし仰せ事を聞きては、私のありきはなかなかすまじき心ばへなるぞ」など、つくづくとまもらせ給ひて、（母君）「なほ渡りてものし給へ。花どもも盛りならむ」と切に宣へば、さぶらふ人々も、（女房たち）「渡らせ給ひね。かばかり御心を入れさせ奉り給ふもかへりてわろきことなり」など聞こゆれば、おはしましぬ。ほころびがちなる柏うち着て、小さき童のをかしげなる、さるべき御菓子などもて参る。（中納言）「ここさへ久しう見ざりけり」とて、御手づから御簾高く巻かせ給ひて、童べに御足参りて、端つ方に添ひ臥し給ふ。傍らなる菓子をうちまさぐりつつ、この子にも賜はせつつ、（中納言）「あこは上の御心地の悪しきはいかに見奉る。あはめ給ふに、嬉しとや思ふ」と宣へば、（童）「いな、さは侍らず。悲しうこそ」とて伏し目に成りて顔を赤く擦りなす。（中納言）「いかで、さはあらむ。平中が涙ななりな。さらでは、菓子の追従ならむかし」と戯れ言し給ふを、まめやかに切にわびしと思へるけしきのをかしくらうたきを、「なほ、童べこそ良き慰めにはありけれ」と思して、（中納言）「よし、言はじ。憎しと思ふらむ。いと恐ろし」など宣ひて、紐とき渡して匂ひ満ちたる花どもの、とりどりにをかしきをながめ出だし給ふ。樺桜のものよりことにすぐれてさし出でたるを、（中納言）「気高く心深き方はこよなく遅れたれど、あてににほひやかなる方は、この花にやよそへてまし」となつかしう思し出づるに、恋しううち向かはまほし。硯引き寄せつつ、こまかに書き給ひて、

（中納言）

うつるなよよそふるからに色も香も

あはれも深き花とこそ見れ

八千代も経ぬる心地のみするは、ことわりなりかし。昨日今日の程だに、『千代しも』と言へば」など尽きせぬことども聞こえ給ひて、すぐれたる枝につけて、遣はしつつ、なほながめおはすに、曇りなくのどかに見ゆる空のけしきも、静心なく、いづ方につけても、思し乱るる心には、うらやましく見渡させ給ふ程に、ありし御返り参らすれば、急ぎ見給ふ。

（八重葎の姫君）

桜花深き色香を見るままに

なほうつろはむことをしぞ思ふ

音にぞ人を」と薄縹の紙に、先々よりももの嘆かしげに心とめたる書き様、文字様など、（中納言）「すぐれたることは、何事にも見えねど、らうたく見まほしき方はこよなくも」とうち返しうち返し見給ひて、「恋しきこともなからまし」と聞こえたる歌の本をやがてこの端に手習ひしつつ、筆持ちながら、少しまどろみ給ふに、又、苦しがり給ふとあれば、急ぎ渡り給ひて、いみじと思したり。

**語釈**

**○汗うち拭ひて咳き居たるもしたり顔なり**　「たひらかに事なりはてぬれば、山の座主、何くれやむごとなき僧ども、したり顔に汗おし拭ひつつ急ぎまかでぬ」（「葵」〔一五〕）

**○あはめ給ふに、嬉しとや思ふ**　今井氏は、「お叱りを受けると嬉しいと思うかい。冗談としても意味がしつくりしない。やや不審」とするが、原文に忠実に解釈するならば、母は君のことをよく叱るから、病気になったり死んだりしたら嬉しいと思うかい、の意である。話している中納言は、母の死という事実をあまりにも悲しんでいるので、その悲しみを周囲に見せないためにかえって、このような冗談を言ったか。

**○平中が涙**　うそ泣きのこと。今井氏は、幾つかの作品を挙げて、詳しく解説している。

**○昨日今日の程だに、『千代しも』と言へば**　「恨むること侍りて、「さらにまうで来じ」と誓言して、二日ばかりありて遣はしける謙徳公　別れては昨日今日こそ隔てつれ千代しも経たる心地のみする」（『新古今和歌集』・巻十四（恋四）・一二三七）《今井氏》。

**○（八重葎の姫君）桜花深き色香を……**　今井氏は、「桜花のふかい色香を見るにつれて、やはり、その衰えることが思われます。（あな

たの御心が変わりはしないかと心配です）」と注する。例えば、小野小町の「色見えで移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける」などを念頭に置いて作られたのだろう（引用には、今回は仮に、集成『無名草子』を用いた）。

**○音にぞ人を**　「あひ見ずは恋しきこともなからまし音にぞ人を聞くべかりける」（『古今和歌集』・巻十四（恋四）・六七八）《今井氏》。

**○恋しきこともなからまし**　「恋しきこともなからまし」は、前項目に記した、『古今和歌集』六七八番の第二句～第三句。

**〔一五　母、重篤〕**

さらぬ別れは世の常なれば、あながち嘆き沈むべきにもあらず。御形見の色をそのままに、やがてこの世を行き離れて、いはけなき程より思ひそめし本意をも遂げて、迷ひ給ふらむ心の闇のしるべをもし奉り、又かくあぢきなき身の落ち着くべき所も求めてむと思ふ道の光には、むなしく見奉る口惜しさは、こよなく慰むべけれど、（八重葎の姫君）「ことをし思ふ」と聞こえし人の面影、常より思ひ出でられて、あはれに恋しければ、（中納言）「我ながらあさましく憂かりける心の程や。仏は、耶輪陀羅夫人をだに捨てさせ給ひて、さばかりの御身をさへやつし給ふに、何の数と言ふべくもあらぬ蔭の小草の露のあはれにかけとめられて、ここらの年月思ひ渡る道をも尋ねで、この世もかの世もいたづらになしたらむ、これこそ仏の固く戒め給ふ道なれ」と心強く思ひ取り給ふには、我が身も残り少なき心地し給ふ。

**語釈**

**○何の数と言ふべくもあらぬ蔭の小草の露のあはれにかけとめられて**　「み山木のかげのこぐさは我なれやつゆしげければどしるひともなき」（『新勅撰和歌集』・巻十二（恋歌二）・七一三・伊勢）《妹尾氏「『八重葎』引歌表現覚書」（掲出誌等は凡例参照）》。〔九〕でも、母が「下草」と言っていたのと照応する。

**○耶輪陀羅夫人**　釈迦の妻。《今井氏》

**〔一六　姫君、叔母出発の予定を告げられる〕**

かしこには、北の方、六条へ移り給へば、いとどつれづれと心細くながめ給ふに、（叔母）「この十六日なん、日もよろしく侍れば、門出しつべく」など言ひおこせ給へるに、たちまちに別れむことの悲しさを、異事なく嘆き居給へり。

大弐の子ども、民部の大輔はこのかみにて、二十五、六にぞ見えける。これぞ、かの宮の御乳主にはありける。容貌もさる方に愛敬付き、

誇らかにをかしき若人なるを少しあさましく口惜しき人の目には、何事もめでたくかたほならず見なされて、（北の方）「父主の（大弐）『あが仏』と言ひたるもことわりなり」と、北の方、人知れず目とどめ給ふ。次々は女にて、三人ありけり。一人は、紀伊守なりける人にはや、とくあはせてけり。三、四をもここかしこより言ひ渡れど、まだかたほひなれば、（大弐）「まづ、このたびは不用なり」といらへて、筑紫へ率て行く。

**語釈**

**○この十六日なん、日もよろしく侍れば、門出しつべく**　「日もよろし」は占いの結果、今月十六日が出発するのには吉日とわかった、の意であろう。

**○『あが仏』と言ひたる**　父である大弐が民部の大輔を見て、顔が良いと思っている、ということ。例えば、『徒然草』第百九十段には、「よき女ならば、「らうたくしてぞ、「あが仏」と守りゐたらむ。たとへば、さばかりにこそ」と覚えぬべし」（新大系。底本は、正徹本）と言う用例もある。

**〔一七　三月十六日、叔母出発。姫君も八重葎の宿を出る〕**

その日に成りて、まだ暁に北の方おはしたり。見し人にもあらず若やぎて、よろしき衣ども取り重ねて、いと心地良げなり。まづ、仲だちの方へ立ち寄りて、（叔母）「今日なん、門出し侍る。聞こえさせしやうに、あなたにものし給ふ人を誘ひたてむとて、かく詣で侍る。日頃よくたゆめ置きつれば、調度やうのものも取りしたたむべき心遣ひも、え思ひ寄り侍らでなん、便なきことなれど、率て行かむ。後に入りおはして、さるべきやうにこしらへて持たせ給へらむや。又、盥、貫簀などやうのくだくだしく見苦しき物どもは、使ひ給ふ御達の里へものし給へ。何の用には侍らざなれど」など、うち笑ひ語らひて、（叔母）「これ、はた、あやしう侍れど、置土産とかや言ふことの侍れば、又、対面賜はるまでの形見に見給はなん、嬉しかるべし」など言ひて、綾織物のをかしき御衣ども取り出で給へり。

かねて（叔母）「暁に」と聞こえ給へば、かしこにも、とく起き給ひて待ちおはすに、車の音の聞こえければ、（八重葎の姫君）「例の、忍び給へる人にや」とただ今などはあるまじきことを思ひ寄り給ふ。（北の方の使い）「北の方、おはしたり」と消息すれば、侍従、迎ひに出で来る。（叔母）「そこたちをも明日よりはいみじう恋しうこそ思ひ出でめ。まして、姫君の思さなん、心苦し」と、言ふ言ふ、下りて、

入りぬ。

（叔母）「ただ今こそ、まかり侍れ。かねてかう思ひそめし道なれど、さし当たりては、なほ空より出で来る心地して、耐へ難くこそ。遅れ先立つ悲しさは、さらぬ別れに慰めて、忘れ草も茂るものなり。生ける限りのかかるこそ命にもまさりて、心肝も失するやうにおぼえ侍れ」とて、うち泣きつつ言ひおはす。親の愛しさはいかなるものとも知り給はねば、さしも思ひ出で給はず。ただこの御方をたのみ聞こえてはかなかりし身をしも生ふし立てられたる人にしあれば、かかる別れの悲しさも、いかでなのめならむ。せきあぐる涙にむせて、いらへだにはかばかしうも続け給はぬを、御方、心苦しきさまにもてなして、（叔母）「このまま別れ奉らむは、あまりはるけ所なき心地し侍れば、難波まで伴ひ奉りて、かかるついでに、住吉にも詣でさせ奉らむ。かつは、あとの白波をも御覧じ送れ。上の御心地まだいとたゆげにと聞き給ふれば、今日明日のうちには殿もおはしまさじ。たとへ聞かせ給ひても、（中納言）『悪し』と宣はせむことにもあらず。さ思し成れ。御物参らせよ。君達もこしらへ給へ」など言ひて、御台手づからまかなひそそのかし、紅梅の濃き薄き、うちたる綾など、車より取り出でて、これかれとかしがましう言ひ騒ぎ給ふ。（八重葎の姫君）「とてもかくても、同じ悲しさなり。動くべくもおぼえ侍らず」と泣く泣く聞こえ給ふに、（叔母）「あないみじや。しばしにても見まほしくは思さで、あひなくかく聞こえ給ふよ。思すらむ人の、その程にものし給はば、会ひ奉り給はざらむ口惜しさに、かく心強くは見え給ふか。女は男に見ゆめれば、愛しうする親はらからも、おほかたのものに成り侍るとは、これにやあらむ。さまで離れがたくも思すな。この世ならず後の世も添ひ給ふ御仲なり。一世に限る身づからをば、その片端だに慕ひ給はで」とうちむづかり給へば、思はずに取りなし給ふもいみじう恥づかしくて、ただまかせられ給へり。（叔母）「いづら、車寄せよ。人々、参り給へ」など甲斐甲斐しく言ひ散らして、（叔母）「（大弐）『夜のうちに淀に』と大弐の宣はせしに、こは明けぬるは。車走らせよ」とただ急ぎに急ぎて、六条におはすれば、（大弐）「など、今まで、遅くはありし」など言ひて、待ち侍る人々の、馬、車引き続けて、弓、胡籙負ひたる男ども、立ち彷徨ひて、たのもしげに見ゆ。

**語釈**

**○これ、はた、あやしう侍れど、置土産とかや言ふことの侍れば、又、対面賜はるまでの形見に見給はなん、嬉しかるべし**　「……見給はむなん、嬉しかるべし」の撥音無表記であろう。〔九〕の「人々もそのよしにもてなさなん、良かるべき。」も、「……もてなさむなん、

良かるべき」の撥音無表記としか考えられない。ここでも、係り結びの法則は乱れている。

**○そこたちをも明日よりはいみじう恋しう……**　「そこ」は、同等、若しくは目下の者を指す人物呼称。「そこにこそは、門はひろげたまはめ」（「幻」〔一〇〕。光源氏が、夕霧を指して「そこ」と呼んでいる）

**○まして、姫君の思さなん、心苦し**　前々項などを参照すると、「まして、姫君の思さむなん、心苦し」の撥音無表記と考えるべきであろう。八重葎の姫君があたしとの別れをどれだけ悲しむか、今から想像するだけで、胸が痛む、の意。ここでも、係り結びの法則は乱れている。

**〔一八　姫君、難波から西へ向かう船にだまされて乗せられる〕**

難波辺（わた）り逍遥し尽くして、船に乗り給ふ。

女君をもかき抱（いだ）き下ろして、（叔母）「あだなる御心ばへをたのみ聞こえて、又見譲る人もなき九重におはしまさせむは生ける心地もし侍らねば、同じ道にとかくはからひたり。（八重葎の姫君）『ものし』とや思ひ給ふ。ものの心もわきまへ給へば、（叔母）『さりとも』と思ひてなん。御ためよろしからぬことは思ひ構へじ。今こそ嬉しく侍れ」とうち笑ひ居（を）るにぞ、御調度など持て来（きた）る。（八重葎の姫君）「さは、たばかり給ふにこそ」と口惜しういみじければ、ことにものも言はれず、ひき被（かづ）きて臥し給ふ。（八重葎の姫君）「思ひ給へらむ心の程は、年頃、よろづにありがたく思ひ知らるれば、宣はせむことをおほかたに背き聞こえむにもあらず。（叔母）『かくこそ思へ』など心うつくしう聞こえ給はば、人知れぬあはれを思ふまでこそあらめ、来し方行く先かき集め思ひ乱るるばかりは、いとしもなくやあらむ。さるを隈なく思し構へてたゆめ給ふは、いかがうらめしからざらむ。今より後（のち）も、よろづまことしう睦び聞こえむ心地もせず、うしろめたう思ひ成らるるにつけては、なかなか知らぬ御心をたのみ聞こえむは、憂きもことわる方もあらまし」と京の方のみ恋しくて、涙さへ止まらぬを、（八重葎の姫君）「又、いかに思し宣はむ」とつつまし。ある限りの人は心地良げにて、「これは」「かれは」と海山かけて尋ね聞きて、「かしこの入り江に青くなつかしげに見ゆるは、何ぞ」など言へば、「かれなん、名に負ふ難波の葦と申す」と教（をし）ゆるを聞き給ふままに、

（八重葎の姫君）

「津の国の難波の葦を吹く風の
　そよかかりきと君に伝へよ

八十島かけて」など思ひ続けられて、目もあはぬに、ただこの隔ての枕の程に、声したたかにてもの言ふ男は（八重葎の姫君）「大弐にや」と聞くに、（大弐）「ありがたきまでものし給へる御有様かな。中納言殿の心ざし深くものし給ふと聞きてしかば、（大弐）『容貌、をかしくおはせむ』とは思ひ奉りしかど、かばかりまでは推し量られざりけり。大輔にはかたじけなく見え給へり」と言へば、北の方、（叔母）「いと嬉しう宣へり。おのが愛しう思ふままに、（叔母）『かたほならずや』とこそ思ひしに」など言ひ交はすを聞き給ふに、今少し心地も消え入りぬべく、つらく悲しきこと世の常ならず。（八重葎の姫君）「かく憂き身ながらも、なほながらへば、必ず、心ならぬ世をも見るべきにこそ。かう心ならずはかりごたるる身とはいかで知り給ふべきなれば、（中納言）『さは思ひつかし』と思し寄らむ恥づかしさ」は、まいて、なのめなるべき心地もせねば、この海にもまろび入りぬべく悲しきに、さはたちまちに流れ出でぬも憂きに耐へける命にやと口惜し。

北の方、寄りおはして、（叔母）「など、かく埋もれては見え給ふ。今更の齢に成りて亡き人のためうしろめたき心を扱ひて、かかる道に出で立ち侍るも、ただ、ひとへに君の御行く末をのどかに見なし奉らむと思ふばかりにこそあれ。身のあはあはしさもはぶき捨てて、あはれに思ひいたづき奉るおのれをば、ある者とも思したらで、あたら御身を心づからもてやつし給はむとや。男といふものはさのみこそあれ。忘るることは、常のことなれば、よし、聞き給へ、都には思し出づる人も侍らじ。後々は、（八重葎の姫君）『よく言ひし』と思し合はせむぞ。かつは、知らぬ人々の見聞き思ふらむ程も（八重葎の姫君）『恥づかし』とは思さずや」と、聞かるべくもあらぬことどもをうち混ぜうち混ぜ言ひ続け給へるに例のものも言はれ給はねど、せめてすかして（八重葎の姫君）「思ひ立つ道だに心安く」と思ひ成り給へば、せめてためらひて、（八重葎の姫君）「別れ奉らむことを嘆き渡りしより、胸ふたがりてなやましうおぼえ給へし。今は心行く道に連れられ奉れば、いかにもその名残はものし侍らねど、かかる道は人に拠りて心地の悪しきと聞きしが、その類ひにや。いと苦しくて、いかにも起き居られ侍らぬ」とまことしうらうたげに聞こえ給ふ。かたへの人々も酔ひ臥して苦しがるもあれば、まして、ひはづなる御身は（叔母）『さもや』と思ひて、御物勧め、よろづに思し扱ふ。離れず近く添ひ居る侍従ぞ、思し入りける程のいみじさはかつがつ見知られけれど、かうたちまちに思ひ定め給はむとは、いかで思ひ寄るべき。（侍従）「我にてだに思ひ出づる御有様のをかしさは、まして、ことわりぞかし」と心苦しければ、言ひ出でむにつけても、催され給はむ御涙のいとどしさもいとほしくて、よろづに紛らはして、ことに言ひ出でぬを、（八重葎の姫君）「これさへつれなう、心づきなし」と思すらむかし。

語釈

○**思ひ給へらむ**　今井氏は、「給へ」に傍点を施してから「「給ふ」とあるべきであろう。語法不審」と注しているが、この注は、「らむ」を一語（平安時代には現在推量の助動詞）と見なした上でのものであろう。私は、「らむ」を完了の助動詞「り」の未然形に推量（平安時代には、未来推量）の助動詞「む」が接続したものと分析する。「り」は四段活用動詞の場合、その命令形に接続するから、「給へ」のままで不審は残らない。

○**「かしこの入り江に青くなつかしげに見ゆるは、何ぞ」など言へば、「かれなん、名に負ふ難波の葦と申す」と教ゆるを聞き給ふままに、……**　もし、葦を自分で見て、葦にちなんだ和歌を詠む、ということにすると、「ひき被きて臥し給ふ」という状況と矛盾する。そこで、女房の誰かが別の誰かに教えてあげた言葉を、八重葎の姫君も、たまたま耳にして、ということにしたのである。

○**津の国の難波の葦を……**　第四句で風の音を「そよ」と言い、「そうだ」と掛けている先例として、「ひとりしていかにせましとわびつればそよとも前の荻ぞ答ふる」（『大和物語』第百四十八段）などが挙げられる《今井氏》。八重葎の姫君は、「そよかかりき（不本意ながら九州に向かう船に乗せられている）」と中納言に伝えたい。

○**八十島かけて**　「隠岐国に流されける時に、舟に乗りて出で立つとて、京なる人のもとにつかはしける　小野篁朝臣　わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと人には告げよ海人の釣舟」（『古今和歌集』・巻九（羇旅）・四〇七）《今井氏》。

○**かく憂き身ながらも**　底本は、「かくうき身なからも」（三八丁裏一行目）で、「か」の下の字は「つ」にも見えるが、「く」と読んで置きたい。第〔一二〕段落の語釈（本誌前号所収）の「かく仕ふるはあるまじきことなり」の項目参照。

○**なやましうおぼえ給へし**　「おぼえ給へし」の「給へ」は下二段活用の補助動詞「給ふ」の連用形。この動詞は、『源氏物語』の場合、ほとんどの用例が「思ふ」に続くが、他に「見る」「聞く」に続く例も散見する。「おぼゆ」を受ける用例は見出せないが、「おぼゆ」も「思ふ」の類義語なので、ひとまず、作者の誤用や書写者の誤写ではないものとしておく。

〔一九　**須磨から明石へ。明石を目前に一同下船**〕

（人々）「この煙の消え返り、絶え絶えに見ゆめるは須磨の浦にや」「いづら」「淡路の島はいづこぞ」など口々に言ふも、さすがに片耳に

入れば、

（姫君）

「藻塩焼く煙も絶えぬ何をかも

思ひ焦がるるたぐひとはせむ

（中納言）『我が心にこそ入らめ』と宣ひしはまことなりけり。かく長らふまじく成り行くは、おほかたの深さにもあらぬを、又、知らせ奉らまほし。

（姫君）

思ひ出づる人もあらじなわび果てて

淡路の島のあはと消ゆとも

難波の葦の、吹き寄らむ風のつてにても、聞き給ふやうはあらむを、（中納言）『さは、我故』とは、いかで思さむ」と思ふも悲し。涙の床に満ちて、起きも上がり給はねど、澪標と成り給ふ御様は、いとどあはれにをかしげなれば、大弐の女たちもなつかしう睦び聞こえまほしくて、心寄せ聞こゆるもいとむつかしうややましけれど、（八重葎の姫君）「うたて心づきなきものに思ひ出でられじ」と亡からむ後を思せば、なつかしういらへなどし給ふを、北の方目安く思へり。明石へ今、時の間と見ゆるに、にはかに風の気色あやにくに吹き出でて、山か何ぞと見ゆる波の、ひまなくうちかけて、沖もいと暗う、そこぞとも見えず。船は今、ただ海の底に沈みぬべくて、いみじうくるめきたるに、わびしき事言ひ知らず。船のうち、上下、こぞりて、童べ・女房などはまだきに泣きののしる。又無くいみじと思へど、舵取りはいさかことともに思ひたらぬ様にて、帆を取り下ろし、魯どもをしたててとかく騒ぐを見るなん、たのもしかりける。げにことなく水際に船漕ぎ入れてつなぎければ、誰も誰も今ぞ生き出でける心地しける。同じ風にて三、四日も過ぐれば、所狭き船のうち苦しとて、宿り取り出でて、ゆするなどせむとて、大弐も北の方も起き上がり給へり。君をも誘ひ給へど、いみじかりし騒ぎにいとどあるかなきかに成り給へば、（姫君）「今しもかき乱れて」と聞こえ給ふ。強ひて宣ふをば、苦しと思したれば、異君達ばかり引き連れ給へり。遅れじと競ひ争ひて、心地良げなるもいとうらやまし、侍従ぞ残り居るを心地も弱くおぼゆれば、（八重葎の姫君）「残りてかたはならむ反故どもも破り捨てむ」と思

ひ成りて、せちにそそのかしやり給ひて、いと苦しきをせめてためらひ起き出でて、近き調度より、つれづれなるままにはかなくかき集めたる藻塩草ども取り出で給ふに、かの御手なる文の三つ四つあるを、他ごとよりもなつかしうて、引き開け給へるに、をかしき節もあはれなる節も、さまざま見所多く書きなし給ふは、かからぬ人だにあはれと見むを、まいていかでか浅かるべき。せきあへぬ涙に、文字も流れぬべし。（八重葎の姫君）「その夜にかかる別れは、思ひかけざりき。今は上の御心地もよろしからむ。おはしやし給ひけむ。あだにおはすと人々は聞こえ知らすれど、心にはさしも思はず。忘れやし給ひけむ。さりとも思し出づることもあらむと思ひやらるるは、我が心のならひにや。寝る夜無ければ、夢にさへありし世は見ず。又なきものに聞き渡りし御調べも、聞かずなりにしよ」など、数々思ひ続くるに、汀まされば、なかなか見さして、こまかに引き破りて、海に落としつつ、

（八重葎の姫君）

思ひきや書き集めたる言の葉を
　底の水屑となして見むとは

とて、袖を押し当て給へるに、御志の山吹なるも、いとど心惑ひして、

（八重葎の姫君）

恋しとも言はれざりけり山吹の
　花色衣身をし去らねば

と、泣く泣く書きつけ給ふ時しも、民部の大輔、寄り来る。

**語釈**

**○（人々）「この煙の消え返り、絶え絶えに見ゆめるは須磨の浦にや」「いづら」「淡路の島はいづこぞ」など口々に言ふ**　「口々に言う」とあるので、この部分、二回、話し手が変わると推定した。一人目の女房が、「あそこに煙が見えるわ。あれが、塩焼きで有名な須磨かしら」と言い、二人目がそれを受けて、「（その、「あそこ」と言うのは、）どこですか」と質問する。三人目が「淡路島はどこかしら」と誰にともなく質問する。

**○さすがに片耳に入れば**　姫君はとても観光気分にはなれず、ふさぎこんでいる。周りの人々には船酔いをしたと公言しているので、横になっている。そのような姫君に、土地にちなんだ和歌を詠ませるために、作者は、女房たちの声を「片耳に挟んで」ということにした。

**○我が心にこそ入らめ**　〔一一〕の「深き所を尋ね給はば、我が心にこそ入らめ」《今井氏》。

**○かく長らふまじく**　底本は「かつなからふましく」とも「かくなからふましく」とも読める（四〇丁裏一行目）。第〔一〇〕段落の語釈の「かく仕ふるはあるまじきことなり」の項参照。

**○思ひ出づる人もあらじな……**　「あは（泡）」は、淡路島という地名から連想された語。「あはとはるかに」などのたまひて、（源氏）あはと見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月」（「明石」〔八〕）。なお、今井氏は、この和歌について、「都の中納言という愛人をもつ姫君の和歌としては、これまた不適切であろう」と述べているが（四七頁）、八重葎の姫君が、身分の違いを気にして、中納言がどうせ思い出してくれないのじゃないかしらと考えた、という解釈をしたい。

**○澪標と成り給ふ**　「君恋ふる涙の床にみちぬればみをつくしとぞ我はなりける」（『古今和歌集』・巻十二（恋歌二）・五六七）《今井氏》。舟の標識は、海の中にあるが、八重葎の姫君も、涙の海の中にある。

**○「うたて心づきなきものに思ひ出でられじ」と亡からむ後を思せば、なつかしういらへなどし給ふを、**　死を決意した宇治大君が、「むなしくなりなむ後の思ひ出にも、心ごはく、思ひ隈なからじ」と思う（「総角」〔三二〕）のに似る。

**○にはかに風の気色あやにくに吹き出でて、……又無くいみじと思へど、楫取りはいささかことともに思ひたらぬ様にて、帆を取り下ろし、**　『義経記』巻四でも、ちょうど淡路島の付近で強風が吹いた。その際も、航海中の義経主従が「帆を下さんと」している。

**○（八重葎の姫君）「残りてかたはならむ反故どもも破り捨てむ」と思ひ成りて**　死を決意した、浮舟巻後半の浮舟も、死後見られては困る、自分の手紙の書き損じなどを焼いたり、川に投げ捨てたりしている。「むつかしき反故など破りて、おどろおどろしく一たびにもしたためず、灯台の火に焼き、水に投げ入れさせなどやうやう失ふ」（「浮舟」〔二九〕）

**○せちにそそのかしやり給ひて、**　侍従も、船から出て浜へ上がりなさい、と、八重葎の姫君は強く勧めた。

**○さりとも思し出づることもあらむと思ひやらるるは、我が心のならひにや。**　「心ならひ」は、自分がこうだから、相手の異性もき

っと同じだろう、という用法が多い。

【用例その一】衛門督、わがあやしき心ならひにや、この君の、いとさしも　親しからぬ継母の御事にいたく心しめたまへるかな、と目をとどむ。（「若菜下」〔二九〕）。柏木は、自分が光源氏の妻である女三宮と密通した。そこで、夕霧も、光源氏の妻である紫上と何かあったのでは、思いを寄せているのでは、などと邪推している。

【用例その二】（夕霧）「……年月にそへていたう侮りたまふこそうれたけれ。……」とうちうめきて、……（雲居雁）「年月にそふる侮らはしさは、御心ならひなべかめり」とばかり、（「夕霧」〔九〕）

【用例その三】わが御心ならひに、ただならじと思すが安からぬなるべし。（「宿木」〔三五〕）。匂宮は自分が好色だから、薫も好色で、自分の妻である中の君に懸想をしている、と邪推している。

【用例その四】八月ばかりに太秦にこもるに、一条より、詣づる道に、男車、二つばかり引き立てて、ものへ行くにもろともに来べき人待つなるべし。過ぎて行くに、随身だつ者をおこせて、

花見に行くと君を見るかな

といはせたれば、かかるほどのことは、いらへぬも便なしなどあれば、

千ぐさなる心ならひに秋の野の

とばかりいはせて行き過ぎぬ。（『更級日記』〔一九〕）。通りがかりの男が、作者の菅原孝標女が「花見に行く」と判断したが、孝標女が「それは、貴方という男性が花見に行く（男性が主語の際には「花見に行く」は好色な振る舞いを連想させる）から、あたしもそうだと判断しただけでしょう」と返した連句である。事実は、孝標女は太秦への参詣に行くのであって、全く的外れな判断である。

『八重葎』のこの文章の場合、「心」の下に「の」があるが、以上の用例に基づきながら考察すると、自分が中納言のことを思い出している、ということを根拠にして、中納言も自分と言う女性のことを思い出している、という類推であって、それが確実な根拠でもないのでやや不安がっている。

**○寝る夜無ければ、夢にさへありし世は見ず。**　この「ありし世」（底本は「有しよ」）は、自分が生きている間、の意味であろう。生きている間は、中納言と再会できない、死んであの世へ言ったら、会えるかもしれない、と言う気持ち。

今井氏は、「夢に谷見る事ぞなき年をへて心のどかに寝る夜なければ」（『後撰和歌集』・巻九（恋一）・五三八）、「順　恋しきを何につけてかなぐさめむ夢だに見えず寝る夜なければ」（『拾遺和歌集』・巻十二（恋二）・七三六）を本歌として挙げる。

**○汀まされば**　「きみをのみなみだおちそひこのかはのみぎはまさりてながるべらなり」（『古今和歌六帖』・第四・二三四五）などに基づき《今井氏》、涙が落ちる、ことを言ったものと解すべきである。

**○恋しとも言はれざりけり……**　中納言から、中納言母の見立てで、頂いた山吹色の衣服を大切に、肌身離さず着用している、と第三句以降で、訴えている。一方、『狭衣物語』冒頭の場面、「とりわきて山吹を取らせたまへる（源氏の宮の）御手つきなどの、世に知らずうつくしきを、人目も知らず、我が身に引き添へまほしく思さるるさまぞ、いみじきや。（狭衣）「くちなしにしも咲きそめけん契りぞ口惜しき。心の中、いかが苦しからむ」とのたまへば、中納言の君、「さるは言の葉も繁く侍るものを」と言ふ。（狭衣）　いかにせん言はぬ色なる花なれば心の中を知る人はなし」のように、山吹は色が同じ黄色だから、「くちなし」＝口無し、を連想させる。八重葎の姫君も、「口無し」であるため、恋しいと言う本心を言うことが出来ないと、嘆いている。《この項目、辛島氏「『八重葎』覚書」（所収等は凡例参照）にも指摘がある》

**〔二〇　民部の大輔、姫君に迫る。姫君、発病〕**

まほならねど、御有様を見てければ、人々のなき折を良きひまと思ひて、懸想するなりけり。いとどかきくれ惑ふに、今ぞまことに消え果てぬべき。いとど引き被きて、まろびのき給ふを、（民部大輔）「など、かくいぶせき御もてなしぞ。昔の御代はりに思しなずらへよ。御有様・もてなしにこそ、端が端にもあらざめれ、深き志の程は負け奉らじ。何か疎み思す。胡の国へ行きし女も侍らずや。その類にも思し弱りて、一言、御声をだに聞かさせ給へ。つれなくかけ離れ給ふとも、かばかりもらしそめ侍れば、はかなき御心にすかされて、止むべきにも侍らず。この、たのもし人にし給ふ人の御おもむけも、許し聞こえむと思し成りてこそ、かく御心行かぬ道にもものし給へ。つひにはのがれぬ宿世と思し弱れ。岩にも松は生ひずや侍る。をかしき浦のけしき、山のたたずまひをも御覧ぜよ。絵に描きたらむのみ目慣れ給へ

らむに、まことのけはひに眺め比べ給へ。所々をも教へ奉らむ。かうのみ沈み給ひては、いとどかき乱るるものに侍り。ひたぶる心は使ひ侍らじ。うとましきものには思さで、うしろやすく思し成りて、思すらむ人の御上をも語り給へ。なにがしが母なん、中務の宮の御乳母にてものし給ひてしかば、そのゆかりにかの宮には親しく仕うまつり侍る。この御思ひ人なん、いと良き御仲らひにて、聞こえ交はし給へば、おのづから慣れ奉りて、なつかしき御けはひも、いとよく見知りて侍る。かかる御仲をかけ離れ給ひて、なにがしが妻など聞こえさせむは、思へばかたじけなしや。さるは、先の世の宿世も、おろかならず思ひ知られて、かつはかなきおのが身も、心おごりせらるるにや、このなめげさを御覧ぜさする」など、さまざま聞こえ続くれど、聞かれ給ふべくもあらず。いとむくつけくわびしくて、汗も涙も流れ出づ。（八重葎の姫君）「さるは、かの思ひかけざりし秋の夕べは、かばかりにや惑ひし。憎き心かな」と、身づから思し知らるる。この数々言ひ集むる中にも、かの御上は耳とどまりけり。何に侍従を放ちやりつらむと、くやしきことさへやる方なくて、いよいよ顔を引き入れて、たけきことはねをのみ泣き給ふを、見聞こえむと、上の御衣かなぐりひきしろふ程にぞ、侍従、帰り来たる。

この人の見るらむを憚り聞こゆべきにもあらねど、うちつけなる様を見えむも、さすがにまばゆくをこがましくて、出でなむとす。

（民部大輔）

みるめ刈るかたないとひそかばかりに

濡るるは海女の袖とこそ見れ

など、したり顔に言ひて立ち出づるにぞ、このおもとは「さなり」と思ひて、（侍従）「こは、あな、むくつけ。御心地悪しき辺りに、いとどかきくれて思さむ、いとほしく」と言ふ言ふ入り来て見奉れば、亡き人のやうにものし給ふ。御衣引きのけ、濡れたる御まみの程ひきつくろひ、御湯参らせなど、よろづに試みるに、あるかなきかに消え入りつつたのもしげなく見え給へば、驚き騒ぎて、北の方へも告げやりけるに、まどひおはして見給ふに、まことに常より弱く、今々と見ゆれば、いかさまにせむと思ひ嘆く。大弐も寄り来て、「この御有様にてはいかがはせむ。御祈りこそこの方にはたのもしきものなれど、この浦にさるべき験者もあらじ。又、京も近ければ、呼びに遣はしてむ。その来るらむを待たむもおぼつかなし。いかにせむ」など言ひ騒ぐ。（舵取り）「この風には、漕ぎ返さむは、いと良かなり。荒き程にも侍らず。ただ難波へ帰り給ひてよろしからむ」と舵取り聞こゆれば、（大弐たち）「さらば、さしてむ」とて漕ぎ出づるに、あやにくなる

こともなく、やがてもとの江に帰りぬ。

宿り取り出でて、その辺りさるべき御祈りの僧、ここかしこより求め出でて、加持参らせ騒ぐ。物怪などにてとみに取り入りたる心地にもあらず。もの聞こしめさで日頃に弱く成り給へば、何の甲斐無し。叔母君、つと添ひおはして、「いみじきことかな。目をだに見開け給へ。舟心地と宣ひしかば、世の常にこそ思ひたゆみしに、いかでおのれを捨てて行かむとは思ひ成り給ふぞ。京に留め奉らず成りにしも、おほかたにや思す」など、ただ泣きに泣きて聞こえ給へど、いらへもえし給はず。

**語釈**

**○胡の国へ行きし女も侍らずや。**　王昭君を指す《今井氏》。「須磨」〔一八〕でも、須磨の地の光源氏が、「昔胡の国に（中国の皇帝が）遣はしけむ女」を思い出している。

**○岩にも松は生ひずや侍る**　「種しあれば岩にも松は生ひにけり恋をし恋ひば逢はざらめやも」（『古今和歌集』・巻十一（恋一）・五一二）などに基づき《今井氏》、あなたは最初はいやだと思っていても、最後には私という男性と結ばれるのですよ、の意。

尚、今井氏は、『狭衣物語』の中の狭衣の詞、「……岩にも松は生ふなるを」（巻二〔一〇六〕）との関連も指摘する。

**○はかなき御心にすかされて、止むべきにも侍らず。**　八重葎の姫君のほうから誘いをかけたかのような口吻である。民部の大輔が、自分の都合で、やや事実を歪曲。

**○をかしき浦のけしき、山のたたずまひをも御覧ぜよ。絵に描きたらむのみ目慣れ給へらむに、まことのけはひに眺め比べ給へ。**　若紫巻で、良清が光源氏に明石の噂話をする際も、その直前に、「他の国などにはべる海山のありさまなどを御覧ぜさせてはべらば、いかに御絵いみじうまさらせたまはむ」、「富士の山、なにがしの岳」など語りきこゆるもあり。また西国のおもしろき浦々、磯のうへを言ひつづくるもありて、よろづに紛らはしきこゆ」とあって、これらの供人たちの発言が、良清の話を引き出したようである。

**○みるめ刈るかたないとひそ……**　「みるめかるかたやいづこぞ棹さして我に教へよ海人の釣船」（集成『伊勢物語』第七十段）などの例に基づいて考えると、「みるめかるかたないとひそ」は、自分と言う男性と契りを結ぶのを嫌がらないでくれ、の意になる。

**○したり顔**　恰も、体を奪ってしまったかのような顔をして。

○その辺りさるべき御祈りの僧、ここかしこより求め出でて、加持参らせ騒ぐ。物怪などにてとみに取り入りたる心地にもあらず。　八重葎の姫君の病状は、『源氏物語』の宇治大君のそれと似る。「（父八の宮が）おはしましし御寺にも御誦経せさせたまふ。所どころに御祈祷の使出だしたてさせたまひ、公にも私にも、御暇のよし申したまひて、祭、祓、よろづにいたらぬことなくしたまへど、物の罪めきたる御病にもあらざりければ、何の験も見えず」（「総角」〔三二二〕）

○もの聞こしめさで日頃に弱く成り給へば、　前項同様、ここも、宇治大君の投影がある。「そこはかと痛きところもなく、おどろおどろしからぬ御なやみに、物をなむさらに聞こし召さぬ」（老人の薫への説明。「総角」〔三二二〕）。八重葎の姫君の場合、「日頃」と言う程、日数が経っていないか。

〔二一　姫君の死〕

かくして、二日と言ふ明けぐれに、消え果て給ひぬ。北の方、いみじとまどひ給ふこと、言はむ方無し。むつかしげにも見えず、いときよらにらうたげにて、ただ寝入りたらむ人の様して、ささやかに臥し給へるを見る心地ども、惜しともなかなかなり。大弐もよよと泣きぬ。民部の大夫に言ひ合はせて、むなしき殻を取り出づる程、ある限り泣きののしる。この人は、まして、せきとどめむ方なく、（民部大輔）「かくながらだに見る世の中の習ひもがな」と胸もひしげて思へり。その辺り近き御津の寺の法師語らひ出でて、煙となし奉る。侍従なん、生くべき心地もせず。とあることにもかかることにもはなれ奉らでならひにしに、煙にもたち遅れじと泣き焦がれて、やがて海にまろび入りけるを、人々早く見つけて、ひき助けてけり。（叔母）「かくまで思ひ入りぬるはありがたきことなれど、一人持たる子を失ひてだにかばかりに思ひ成るは難きわざになん。まづは我こそかくあるべき道なれど、亡き人のため、ことなる後の世の功徳とも成らざらむものから、返りて罪得べきことと思ひ返せば、さはひたみちにも思ひ成られず」など、泣く泣く諫め給へば、（侍従）「さらば、かたちをやつして、御墓の宮仕へをだに」とせちに聞こえて、尼に成りぬ。かの御装束・調度やうの物、さるべきは仏に供養し、尼君にも賜はせ、又かうながら世の中を渡るべき方もねんごろに思ひやり給ひて、はかなく七日も過ぎぬれば、悲しとても、かくて月日を経べき道にもあらねば、船漕ぎ出だして下り給ふに、うつつともおぼえずとて、北の方は涙の暇なくて、海も深く成る心地し給ふ。「はかなう宣ひ出づる一言も、なつかしうものし給ひしものを」と、むすめどもも恋ひ聞こえけり。

語釈

○むつかしげにも見えず、いときよらにらうたげにて、ただ寝入りたらむ人の様にて、　大君の死の直後も、「ただ寝たまへるやうにて、変りたまへるところもなく、うつくしげにてうち臥したまへるを」（「総角」〔三六八〕）。

○この人は、まして、せきとどめむ方なく、（民部大輔）「かくながらだに見る世の中の習ひもがな」と胸もひしげて思へり。　薫も、「ひきとどむべき方なく、……かくながら、虫の殻のやうにても見るわざならましかばと思ひまどはる」（「総角」〔三六八〕）

［付記］平成一八年には写真版の入手を許可して下さり、この度紀要への釈文掲載を御快諾下さった静嘉堂文庫の皆様に、心より御礼申し上げます。

［平成二〇年一〇月八日提出］

［二〇］釈文を「……「……遣はしてむ」「その来るらむを待たむもおぼつかなし」「いかにせむ」……」と訂正する（平成二〇年度大学院授業に於ける安達香織氏の指摘）。

［平成二〇年一二月三日追記］